

ったところ、開口障害は消失し、顔貌は対称性となった。洞粘膜の断裂があったため粘膜を除去、鼻腔側に対孔を形成し、Foley 30号の balloon catheter を挿入、空気を30ml注入し手術を終了した。術後21日目に catheter を抜去したが、顎骨の変位はなくまた術前にあった知覚麻痺、開口障害は認められなかった。現在 4 ヶ月を経過しているが、顔貌所見、X線所見とも良好である。

演題 3. 慢性下顎骨骨髓炎に関する臨床病理学的検討

○真山 孝, 遠藤隼人, 工藤啓吾, 藤岡幸雄
岩手医科大学歯学部口腔外科学第 1 講座
阿部節子, 鈴木鍾美
岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

近年、化学療法が進歩し、炎症性疾患の治療成績は著しく向上している。しかしながら、その診断や治療に際しては、非常な困難を伴う症例をしばしば経験する。最近、私どもは開口障害、腫脹、硬結などを主訴として来院した慢性下顎骨骨髓炎の 5 症例について、今後の治療指針を得る目的で臨床的、病理学的に検討を加えたので報告する。

5 症例はいずれも 20~30 才台で、来院までの期間は約 1 年におよぶ症例が 3 例であった。来院前に下顎大臼歯の抜歯をうけた症例は 4 例で、非抜歯例は 1 例であった。いずれも種々の抗生物質の投与をうけてから当科を受診している。臨床的には最大開口度が 4~12 mm が 2 例、20~25 mm が 2 例で、1 例は 36 mm であった。また 5 症例とも顎角部を中心とした腫脹、硬結が著明であったが、歯牙ならびに歯肉粘膜の症状は軽度か、または殆んど認められなかった。X 線的には種々の程度に下顎臼歯部から下顎枝部にかけて、スリガラス様骨不透過像あるいは一部に骨吸収像がみられ、下顎骨下縁における骨膜の肥厚が認められた。病理組織的には、骨髓の炎性肉芽化、線維化および骨の複雑な改修像 (Osteoid の形成の程度、骨梁の石灰化の程度および大きさ、形、配列密度の程度など) などが認められ、また、下顎骨外周縁においても骨髓と同様な所見をみ、放射状の骨新生像の添加がみられた。細菌検査ではいずれも菌の検出はみられなかった。治療は抗生物質投与によっていずれもある程度の緩解がみられたが、完全消失には至らなかった。そこで 4 例は該部歯

牙の抜歯、搔爬を行ったところ、1 例は経過良好であるが、3 例は再発を繰り返している。また下顎骨離断を行った 1 例は経過良好である。

以上、化学療法に加え、原因歯の抜歯や搔爬などで良好な経過を辿る症例もあるが、症状の遷延例や再三にわたる再発例では、積極的な顎切術が必要と思われる。

演題 4. 松尾村における歯科保健活動の評価

1 年後の成績について

○原田 潮, 飯島洋一, 松田和弘, 高江洲義矩
岩手医科大学歯学部口腔衛生学講座

わが国における齲蝕の蔓延は歯科医療における需給関係を著しく不均衡にしている。疫学的解析結果によっても、わが国の乳歯および永久歯齲蝕罹患が急激に上昇していることが確認されている。このことは、学校保健において、歯科保健指導の効果が減弱されている現状に至っている。

岩手県松尾村において、昭和 49 年から齲蝕予防を目的とした地域歯科保健活動を岩手保健所、村の保健担当者、県衛生学院、岩医大口腔衛生のメンバー構成で行っている。今回、この活動状況についての評価を試みた。乳歯齲蝕罹患についてみると、def 者率、def 歯率、def Index について 1 才~4 才までの各年齢群において齲蝕罹患の減少傾向がこの保健活動 1 年後においてみられた。1 才児については、def 者率において、前年度 45.1%、1 年後 24.4%、def Index では、前年度 1.57、1 年後 1.00 と顕著な差異がみられた。3 才児では、def 歯率 (前年度 38.2%、1 年後 34.7%) に有意の差が認められた ($P < 0.05$)。予防活動実施 1 年後に齲蝕罹患に減少の傾向がみられたことは (罹患像のパターン分析結果)、1 才児からのフッ化物塗布と母親に対する食事指導および歯口清掃指導が乳幼児の齲蝕発生の予防に効果的であることが今回の資料から推察される。その他、乳歯齲蝕の進行が早いという特徴は、一方において齲蝕の予防効果が永久歯よりも早期に現われることが考えられる。なお、本活動は継続中であるので、詳細な評価が可能となろう。

演題 5. 歯科矯正学教育を考える

一卒前教育と卒後教育(大学院)について一